

画文集の原風景に見る吉野川河口域の地形と生態系の特性

清野聡子¹・井口利枝子²・近森憲助²・岩見玉子²

1正会員 工博 東京大学大学院 総合文化研究科 広域システム科学科
(〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1)

E-mail: fwid6176@mb.infoweb.ne.jp

2非会員 とくしま自然観察の会 (〒770-0944 徳島市南昭和町4-70-3-301)

E-mail: office@shiomanekei.net

徳島市は、城下町として吉野川河口域に砂州や網目状水路の原地形を利用して形成された都市である。地域で出版された画文集には、地域住民の郷愁を誘う画と文章が載っている。画家の目を通して見た原風景は、環境要素が抽出され、視点が明確である。どのような環境要素が失われると住民は哀惜を覚えるのか、画で表現された時期の自然地形の改変状況を空中写真から判読した。河口域の開発による原風景の喪失を、画の中に判読できる地形と生態系の特性と併せて考察を行う。

Key Words : Yoshino River, estuary, iconology, sand bar, tidal flat, environmental recognition

1. はじめに

都市は、自然地形を活用して形成されてきた。自然条件は地域の生活や産業に密接にかかわっており、住民も無意識のうちに自然環境の恵みを享受している。一方、開発によって地形特性が大きく変わると、住民の生活空間の基本条件が変わることになる。

身近な景観の変化の実感とは、文化人により感知され表現として記録される。住民に広く受け容れられている作品は、共感した人が同様の思いを持ったと考えられ、代表的な感覚を表現していると判断される。

本研究では、河口都市として発達した徳島県徳島市の吉野川河口周辺を表現した「画文集」の画と文章を判読した。開発による地形変化と景観の変化、それに対する住民の意識を地形学と図像学的視点から研究を行った。地域のアイデンティティは景観と密接に関係すると考えられ、その変容はアイデンティティの実感の低下をもたらす可能性があり、地域社会の維持のためにも考えるべき重要な問題である。

2. 吉野川河口域の特性

徳島市は、城下町として吉野川河口域に砂州や網目状水路の原地形を利用して形成された都市である。海運と舟運を活用して発展したため、水域はかつては道路網で

もあり、住民にとっても身近な存在であった。

自然景観としても、徳島は、大河の河口や連続する海岸に発達する砂州、網目状水路、泥干潟、砂浜、塩湿地という多様な環境に恵まれてきた都市であった。相対的に開発が遅れてきたが、それだけに近年まで自然環境を保持し、現在でもなお貴重な自然が都市に近接して河口部を中心に残っている特性のある都市である。

吉野川は「四国三郎」の呼称をもつ四国一の大河である。干潟が広がり、河道内の干潟や砂州はシオマネキ¹⁾ほか多くの希少生物の生息地となっている。またシギ・チドリなど、150種を上回る貴重な渡り鳥や留鳥の餌場となっている。河口から前浜にかけての干潟や浅海域は豊かな沿岸漁場であり、絶滅危惧種の魚類のアオギスもかつて生息していた。河口干潟では採貝や潮干狩りが行われ、一面の海苔漁場が広がっていた²⁾。

1980年代後半以降、吉野川河口域は開発が激しい。右岸側は港湾人工島、左岸側は空港拡張による埋立が行われた。第十堰の可動堰化の検討や、農地防災事業（吉野川下流域）での取水量の増加による汽水域環境の変化も危惧されている。2004年からは河口に道路橋の建設が始まり、河道内構造物による水面や空間の遮蔽による周辺の干潟環境や生態系への影響が危惧されている。環境影響評価に資する汽水域の生物と物理環境の関係、地形変動の研究が行われている^{3) 4)}。

徳島がもともと保有してきた地形的条件や空間特性が、

これらの開発によって大きく変化を遂げ、今後の埋立や架橋工事によりさらなる改変が予定されている。

3. 「画文集」の特性

時々刻々と移り変わる自然環境を題材にした表現活動として、さまざまな手法がある。言語表現として、俳句は歳時記の仕組みを内在している。視覚的表現として写真がある。不可逆の変化に対しては、写真は強い記録性を持ち、地域環境の定点観測としての資料性も有する⁹⁾。

絵画は、視覚的表現のなかでも、画家個人が抽出した要素が集約されている。

絵画、写真地域で出版された出版物、たとえば画文集には、地域住民の郷愁を誘う画と文章が載っている。画家の目を通して見た原風景は、環境要素が抽出され、視点が明確である。さらに、短い文章が添えられており、凝縮した思いの文章表現もなされている。

「画文集」は、画集に画家本人による短い文章が添えられている。画と文章の両輪による表現形態である。

本研究で対象とした画文集は、徳島市在住の画家の「飯原一夫氏」の作品群である。地元の新聞広報での掲載や、市内での個展の開催と、徳島市民の目に触れる機会が多くあった作品である。

『徳島—あの日 あの日』⁶⁾は阿波銀行創業100周年記念出版、『画文集 なつかしき徳島』⁷⁾は四国放送テレビ開局30周年出版と、地域を代表する企業の記念誌として出版されている。また、徳島中央公民館により徳島市民叢書の一環として『画文集 徳島慕情』⁸⁾が出版されている。これらは、飯原氏の作品群が、地域住民に広く愛好されている示標といえよう。

このような地域に根付いた出版物としての画文集を読むと、どのような環境要素が失われると、住民は哀惜を覚えるのかが伺える。表現された時期の自然の大規模な改変状況は、空中写真から判読した、河口域の開発による原風景の喪失の状況について、画の中に判読できる地形と生態系の特性とを併せて考察を行った。

本論文では、画文集からの判読や考察を行った後、飯原一夫氏ご本人に制作過程についてのヒアリングを行い、作品の背景の確認を行った。飯原氏の画文集での、画と対応する文章を引用すべき文書資料として「」内に示した。

(1) 北浜の松¹⁰⁾

「中徳島町と住吉の間に架かる徳住橋の西のたもとに、大きな松の木があった。太い幹全体が川へ乗り出すように傾いていて、満潮時には枝先が水面に触れはせぬかと思われるほどであった。風の強い日、松に吹く風の音は中空に伝わらずに川面を渡り、はらはらと散る松葉の大方は流れに落ちた。

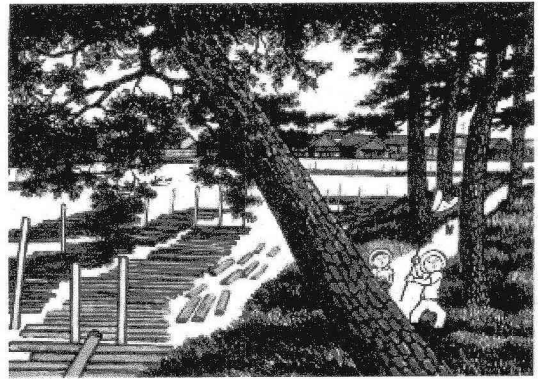


図-1 北浜の松

中徳島町の東側は土手になっていて、川沿いの辺りを古い地名で「北浜」と呼ぶ。土手に並んだ松は藩政時代からのもので、参勤交代の時、藩主の舟を家臣たちが家紋入りの幕を松並木に張り巡らせて歓送迎をしたという。川に乗り出していた大きな松が枯れて切られて、もう何年になるだろう。しばらくは徳住橋の西のたもとにぽっかりと大きな穴が空いたように思えたが、日々の暮らしに流される人々はそれにも慣れ、どうということもなく時は流れる。

「白砂青松」——どうということもなく、松も海岸もすべて変わる。全国的規模で変わる。」

徳島には江戸時代から城下町として古絵図が残されているが⁹⁾、松林はそれらの絵図の海岸部に決まって描きこまれている風景である。絵図では、松林の表現は抽象的なため、陸上の風景を推定するには、往時の画や写真を参考にするしかない。たとえば、松の大きさや間隔、下草の植生、水面との距離という要素である。

飯原氏の画では多少のデフォルメはあっても、画家の記憶や写真資料との照応があるため、要素が描きこまれている。

海岸部の松林の大方は二次林であるが、その林からの落葉の行く先など水辺環境の観点からも興味深い。

「松の枝先が水面に触れんばかりであった」とすると、松林の松は水面に影を落としており、そこには魚類が生息し、それを捕ろうとする鳥類も止まっていたであろう。さらに、「松葉の大方は流れに落ちた」とすると、リターが地上だけでなく水中にも落ちていた状況がわかる。松林には、下草が生育している様子も伺える。水域には貯木場があり、静穏な水面が広がっていたと考えられる。

この松林は藩政時代からあり、参勤交代のときに大木の松に家紋入りの幕を張る利用が行われ、文化的機能も果たしていたことになる。たんなる土手の植生として以上に人々に注視され、管理されていたであろう。

この画の場所も含む徳島市内の松林は、伐採や松枯れで失われていった。地域の松林の喪失を通じて、同時期に、

全国的に白砂青松の喪失が進行していくのを懸念している。徳島と同じ事が、他の地でも起きているだろうとの想像の展開である。実際にその想像は当を得ていた。

(2) 松林と葦原⁷⁾

「むかし、沖洲は沖の波の間に見え隠れする州であり、高洲は波が運ぶ砂が集まって高くなった州であった」。

地形学的には、河口域では砂州がバリアとなって外海からの波浪を防ぎ、陸側に静穏な水域を擁する。一般に、砂州に砂浜・浜堤・小砂丘がみられ、水域は塩湿地となっている。

画によれば、植生としては、浜堤に松が植林され、塩湿地は葦原となっていた。記述では、この砂州地形を“高洲”と呼び、波が運ぶ砂が集まって形成され、沖の波間に見え隠れしたというから、外海の波浪に面していたとの表現であろう。実際に、沖州は、徳島で一番海側の砂州で、河口全体のバリアとなっている。

松林がある“高洲”の尾根からの景観は、動と静の対照的な水域であったろう。海側には波浪高い紀伊水道が見え、振り返ると陸側に静穏な塩湿地のラグーンの水面



図-2 松林と葦原

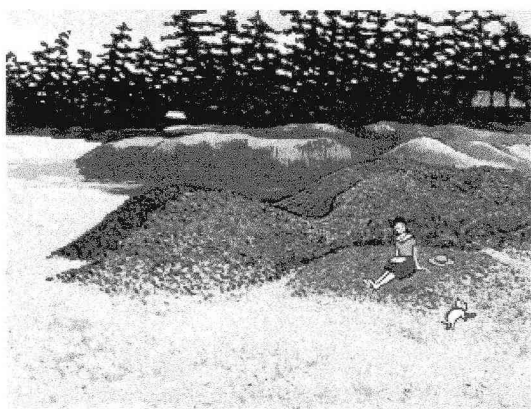


図-3 沖洲海岸

と葦原が広がっていたと考えられる。この画の構図は、海側を背にしてラグーンをみる視点からの風景の切り取りである。

(3) 沖洲海岸⁷⁾

沖洲海岸は、徳島市の市街地に一番近い、新町川河口に続く砂浜海岸であった。徳島市民にとっては、海水浴の思い出が共有できる身近な海岸であった。現在は、流通港湾の埋立により、海岸の沖に人工島が建設され、水面は残されたものの、景観も環境も大きく変貌した。かつての白砂青松の砂浜の前面は水路となり、海の波浪や風が直接寄せる環境ではなくなった。

この沖洲海岸は、飯原氏の題材としてよく取り上げられている。

「新町川は突堤の先を過ぎると海へ出る。

川口を出た流れは再び帰らない。慕情を抱いて流れを追ってきた人も、そこから先へは、もう行けない。」

新町川は徳島市街地を貫いて流れる二級河川で、徳島市民にとって身近な川である。下流ではゆったり流れる新町川の流れは、河口の海側には外洋に続く紀伊水道に注いでいる。そのような、陸と海の境界であるというイメージが表現されている。

さらに、画文集の詩的な世界にはそぐわないような、具体的な記述がみられる。

「今、沖洲海岸で見る海は埋め立て工事中海である。今年、1989年の夏から海水浴場の廃止された海である。

『渚の情感』が拒否された海である。」

長年にわたって親しんできた海岸が、今年、海水浴場としては閉鎖され、埋立工事であるという時期にこの画と詩が創作されたことがわかる。つまり、この画は、写生ではなく、画家の記憶に残された風景である。創作の時点で、現実の沖洲海岸自体は、目前で次々と付加逆に改変されていく。

画家の訴える『渚の情感』が“拒否“されたとししている。海水浴場が今年廃止された、という明確な節目の時点での述懐は、ノスタルジーだけでなく悔しさすら感じさせる。画家が埋立反対運動のような明確な反対の意思表示を社会に対して行ったのか、個人の憤懣を心に秘めたままこの光景をみていたのかは、不明である。

『渚の情感』とは、具体的には以下のような動植物による季節感である。

「かつて、沖洲海岸は松風と波の昔だけの寂しい海岸であったが、それでも季節になると、松原に続く土手に小さな海辺の花が咲いた。ハマエンドウやハマヒルガオの咲く土手と、それに続く千鳥の足跡の残る渚は、人びとの心に大きな安らぎを与えてくれた。」

原画はカラーであるが、画面の下半分はピンク色に彩られ華やかな光景である。少女が腰掛けている凹凸のあ

る地形は、海岸砂丘と考えられる。砂丘斜面は、乾燥しており、腰掛けるには快適な場所である。また座れば視線が低くなるので、小高い場所から平坦面の広がりを見近に感じることができる。砂丘を覆うピンクの花々はハマヒルガオであろうし、砂丘下の平坦面は文からはハマエンドウと思われる。なお、沖州海岸の松林の陸側には水田が広がっており、春にはレンゲの花も咲き乱れていたと住民が語っている。ハマヒルガオは初夏、レンゲは早春と開花時期はずれるが、いずれにしても春から夏にかけては、沖州海岸の砂丘の陸側が明るい彩りがみられたこと、この画に描かれたように、少女がゆったり時間をすごし、子犬が足元で遊ぶ情景が観られたことであろう。

「渚には、渚でしか生まれない独特の情緒があった。渚には、渚でなければ育たない個性的な思想を生み出す力があった。」

渚、という語が2文で4回繰り返されている。画家の渚への思いの強さが表現されている。ここでいう、「渚でしか生まれ得ない独特の思想」「は、この画についての一連の文章からは、陸と海の境界の海岸を貫く川の流れの方向性で示され、河口の先の海へ出たなものもが不可逆だ、とする思想や情感ではないかと思われる。

「新町川は突堤の先を過ぎると海へ出る。川口を出た流れは再び帰らない。慕情を抱いて流れを追ってきた人も、そこから先へは、もう行けない。再び帰ることのない遠い日への思いだけが、広い海と空へ広がりーそして、消える。」

文頭と同じ文章が繰り返されている。新町川の河川水が海に消えていくように、埋立っている最中の沖州海岸の光景もまた、二度と戻ってこない環境であり、いくら郷愁を訴えたとしても取り戻すことのできない存在だ、という意味であろう。

このように身近な美しく楽しい思い出のある海岸環境の喪失に対峙して、埋立工事が進行している海岸への心乱れる思いが表現され、同様の思いを抱いても表現することのなかった徳島市民の心を捉えたと考えられる。

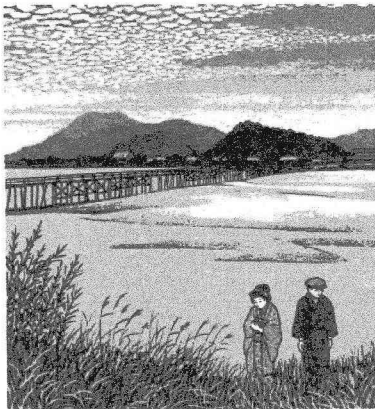


図-4 古川

(4) 古川⁷⁾

河道内の地形が表現され、植生帯や砂州、渚筋、広く静穏な水面が表現され、河口の広さにも言及している。

「1926（大正15）年の改修工事完成までは低い土手で、大水の時は流れが頭上を走るようであった川も、ふだんは悠々。」

古川辺りから見て、川内の小松や沖洲の高洲の松原が薄墨色にかすんだのは、あまりにも川口が広いためのものか、それとも、心が涙ぐんでいたためなのか。」

出水時との比較で、平常時の河川環境が表現されている。「川口が広い」のが、対岸の景色がかすんでいる理由ではと、記述している。平常時の河道内の視界が開けたなかに多様な環境が配置されている風景が原風景だったとすると、その後に河川改修や護岸工事によって縁取られ、土砂採掘により河道内砂州が減少した後の風景では、このような文章が表現されたかどうかは興味深い。

(5) 別宮川⁸⁾

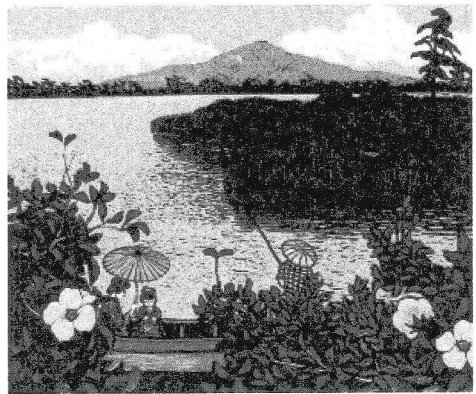


図-5 別宮川

「むかし、吉野川の川口の近くを別宮川と呼んだ時代があった。大正の終わりに改修工事が完成するまでの別宮川の堤防は、身の丈よりすこし高いだけであった」。

この記述から、現在の堤防が出来る以前の景観が推定できる。水面から植生が続き、高い堤防という人工構造物による横断的な視界の遮蔽がなく、背後の山地へと連続した景観であった。

次に、動植物の描写がある。

「葦が伸びて新しいあおみどりの葦が水面を隠すようになると、その葉の陰でヨシキリがやかましく鳴きたてて巣をかけ、川岸ではハマボオの柔らかい黄色の花びらが川風に揺れていた」。

河岸の葦原と、そこに生息する鳥類の記述であるが、音響空間まで表現されている。さらに、現在は徳島市内で観察できなくなった希少植物（徳島県レッドデータブック

では絶滅危惧Ⅰ類にランク)のハマボウが、当時は生育していたという記録である。徳島市内では河口域に普通に見られた植物であり、初夏に黄色いハイビスカス様の花を咲かせるため、地域住民の記憶にも鮮明に残っている。現在は徳島県内では、県南や鳴門に散見される程度となった、このハマボウについての記憶と、河口域の自然の残存状態は対応するであろう。

高洲は波が運ぶ砂が集まって高くなった州であった」。高洲の場所を描かれた植物から推定する。ハマボウは、葦原より高い標高の河口の砂礫浜に生える木本植物である。松は砂州上に生える。前面にハマボウが生えている画家の視点が置かれている画面手前の場所か、画面右側の松が生えている根元のどちらかである。

河口域は、視界が開ける空間であると同時に、微妙な標高差や浸水の状況により植生が変わり、多様な環境が形成されている。画として切り取った空間にそれが表現されている。

(6) 津田海岸⁸⁾



図-6 津田海岸

津田海岸は、吉野川河口右岸側の沖州海岸に連続する海岸である。沖州海岸同様に白砂青松で岩礁地帯に続く海岸で、徳島市民に愛好された海水浴場であった。画ではその光景が表現されている。

前述の沖州海岸と同様に、木材団地として港湾埋立が行われ、現在は自然海岸は失われ、工業用地になっており一般市民が立ち入りにくい空間に変容してしまった。

画文集の文章では、画は開発前の光景である。一方、文章は、以下のように埋立の光景を激しい筆致で記述している。

「『津田の海岸が埋め立てられている』そんな話を聞いて、ある日、海岸を見に行った。松原の向こうに青い海は無かった。赤土が覆い尽くした海の上を走るの、白い船でなくて、異様な姿のオレンジ色のブルドーザたちであった。」

さらに、埋立工事現場の入口に佇んだであろう記述がみられる。

「木材コンビナートの建設中なのだという。埋め立て地の入り口に『港湾管理者の許可なくして進入を禁止する』とあった。心に激してくるものがあつた。砂浜が消え、海が死んだ海岸に許可を請うてまでもはいる必要もなろうと海岸を立ち去った。」

画家のこのような悔しさは、組織化された反対運動ではなく、個人の胸に沈み、画文集での表現として表出したと考えられる。同様の気持ちは読者にもあり、共感を得ていると考えられる。

「白い砂に青い松。美しい海岸は毎年夏になると海水浴をする人々でにぎわっていた。——松原遠く消ゆるところ——かつて歌声は、はるかな海のように広がり、いつの時代にも美しい海岸はそれを愛する人たちの心の中に生きていた。今、海の歌声は消えた。足元にあの夏の日の砂の感触はない。ただ、遠く去った海に残された松の木の影が夕日に長いだけである。」

“海水浴場”の光景だけでなく、音響や触覚での思い出が表現されている。地域の人々の海水浴場が、沿岸開発で失われてきたが、その当時の住民側の心情が表現された貴重な記録である。

(7) イナ池埋め立て⁸⁾

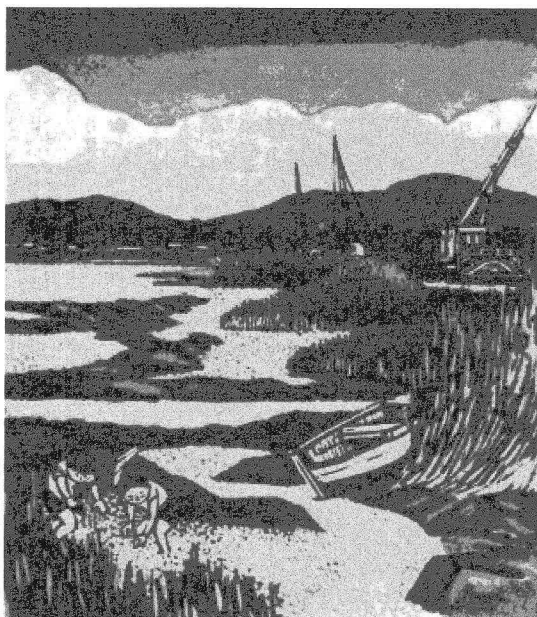


図-7 イナ池埋め立て前

イナ池は、吉野川河口右岸の沖州地区にあった潟湖(ラグーン)である。砂州で海と遮蔽され、陸側に塩湿地とともにあり、新町川と小水路状の沖州川でつながって

いた。文字通り、イナ（ボラの幼魚）が群泳するような汽水域であった。

「むかしの沖洲は、イナ池のほかにも池や水路が多かった。今の北沖洲の一丁目から二丁目にかけての辺りにも、沖洲川から海の水が入ってくる潮入り川が続いていた。」

出水時には、このような潟湖やワンドのようなポケット状の水域には、河口域の魚類が逃げ込みトラップされることがある。

「水が出たときなどは、二丁目の水門の近くで『○○○突き』といって、底が見えなくてもカナツキで○○○めっぼうに突いて回ると、コチヤカレイのびっくりするほど大きなのが何匹もとれたということである。」

このイナ池でも、コチヤカレイという沿岸性底生魚類が採捕されたようである。

さらに、海洋生物の記述も見られる。

「南沖洲二丁目の墓地の東を旧地名で『亀の生砂』という。むかし、波打ち掛ける砂浜に海亀が卵を産みに上陸していた名残である。」

ウミガメの産卵は外洋に面した砂浜が適しているが、特に後浜が発達し浜幅が広いとの条件がある。これは、イナ池の潟湖を擁する砂州の海側は、そのような広大な砂浜が発達していた地形であったことを意味する。

さらに、砂州周辺の海岸勾配の推定も表現されている。

「船戸神社の北に『北端』と呼ぶ地名があった。言い伝えによると文化・文政までは、このあたりに千石船が着いたという。『北端』は沖洲浦の北の端であり、それより先は海であったことがよく分かる。」

千石船が停泊可能であった砂浜は、前面の水深がある程度確保されている必要があり、遠浅ではなく、海岸勾配が急である必要がある。そのような砂浜は、砂嘴先端部に見られ、自然地形を利用した河口湊ではそこに停泊している。吉野川河口周辺には、砂嘴地形が多くみられた記録が、古文書や空中写真から判読できる。沖洲集落がある砂州もまた河口部では、“北端”が砂嘴状の地形であったと考えられる。

本稿で述べてきたように、画家の景観への興味は、単なる美しさだけでなく、自然地形や植生の形成メカニズムにも拡大していたと推察されるが、町名にみられる自然と人間の関係性への強い関心も示されている。「ここ、二、三十年ほど、全国的に思い切りのよい町名変更が盛んである。いやらしいまでに経済性を追求する土地利用や地価の高騰と合わせて、これこそ、名実ともに合理的になったと感嘆すればよいのであろうか。」

(8) 末広岸壁埋め立て地⁶⁾

この作品は、一見すると穏やかな風景である。しかし、埋立工事の途中の過渡的な風景であることを文章から知り、

読者は驚くのではないだろうか。

「福島新橋から沖洲大橋へ出る臨港道路の南は、埋め立て工事が始まる1960（昭和35）年ごろまでは大洲であり、干潮の時など海へ返る水が急流のようであった。」

この場所はもともとは、河口域の干満での潮位差が激しい水路もしくは滞であったと考えられる。

画面には、マツヨイグサと女性が大きく描かれている。「サンドポンプの造った人工の砂地に、それでもハマエンドウやマツヨイグサの咲く数年があったが、それも工事が完成すると消えた。」

——面影はすべて遠い日のこととなった。」

ポンプ浚渫で河口の土砂が噴き上げられて造成された埋立地が、短期間でも植生で覆われ花々もみられたが、その景色もまた過渡的であり消えていった、という複雑な感覚が表現されている。

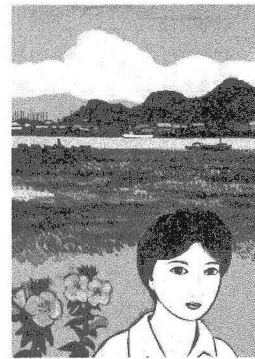


図-8 末広岸壁埋め立て地

(9) 地藏さん⁶⁾



図-9 地藏さん

この作品は『地藏さん』という童話の一連の挿絵の一部である。吉野川右岸の住吉地区の環境変遷を“地藏さん”の定点観測的な視点から描いている。

「塩屋大岡は砂子の浜でなんとしてようと地藏に問うた

塩屋大岡の北前船は乗ったら戻りやせぬ
塩屋大岡の百間波止でわしといっしょに千鳥も泣いた
塩屋大岡は波止場の地蔵風と波とで日が暮れる。」

これが、住吉地区の原風景で、長らく地蔵さんが見てきた環境である。この童話は、前半が童話のタッチで表現されているが、中盤の環境変化が激しくなった時代からは説明的な記述の様相が濃くなってくる。

「徳島市住吉5～6丁目は、藩政時代に塩屋と兵が開いたので『塩屋大岡』と呼ばれていた。その東に吉野川へ長く突き出した『百間波止』や、短い『泣き波止』があり、毎年、秋が深まるころ、藍の肥料となる干鰯（ほしか）を積んだ北前船の帆柱が立ち並んだ。」

住吉地区が波止場であった様相を語っている。東国からの干鰯を積んだ北前船は住吉に停泊していた。一方、干

鰯を肥料として必要とする藍畑は、中流域の氾濫原の農村地帯である。中流には、舟運のための帆船が就航していたので、住吉は海運と舟運の積み替え場所でもあった。そのような、河口の自然が残りつつも賑やかな波止場があったのが住吉地区の近世の風景であった。

そして、吉野川河口では、大正時代以降、治水対策を主目的とした大規模な河川改修による河道掘削や流路切り替えによって環境が大きく改変された。その後、昭和時代のさらなる開発により、さらに改変が進んだ。

地蔵さんの視点からの吉野川河口域の年代記であり、最終場面は、地蔵が葦原を渡る風の音を思い出す回想で締めくくられている。この「地蔵さん」の定点観測的な感覚は、画家自身の徳島の自然と人の変化への感性和眼差しと考えてよいだろう。



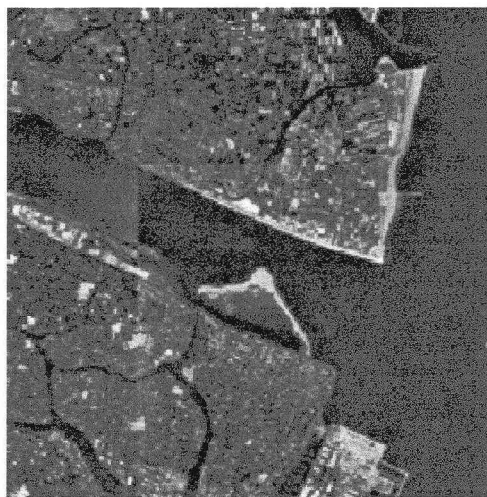
(a) 1969年



(c) 1990年



(b) 1972年



(d) 1996年

図－10 空中写真にみる吉野川河口の経年変化

4. 空中写真判読による吉野川河口の地形の変遷

人為改変による地形変化は、地形図や空中写真から判読できる。本稿では、画文集が描かれた吉野川河口域の変遷について、図一10に示す1969年、1972年、1990年、1996年の4ヵ年の国土地理院の空中写真を材料に判読を行う。

(a) 1969年

河口域の大規模開発直前の地形である。

特徴的なのは、河口の海側に砂州がみられる点である。

“鬼ヶ州”と呼ばれる砂州が存在していた。

この砂州は、外海の波浪を防ぐバリアとなり、陸側は静穏であったという。実際に、河口の河岸と海岸から鬼ヶ瀬に至るエリアは、一体が干潟、浅海域かつ静穏な水域となっており、採貝漁場、海苔養殖場としての漁業利用のほか、市民にとっても潮干狩りの場であったという。左岸側の小松海岸には砂丘がみえるが、耕地整理がまだなされておらず、河口沿岸の砂丘を有する砂浜地形の名残を残している。

吉野川の河道内の水深が浅かったと考えられ、現在の河道内干潟に特有の三角形の住吉砂州が目立った規模で出現していない。

(b) 1972年

河口域の土砂掘削の改変が生じた直後の地形である。1970年の大阪万博では、関西地方での開発が多くなり、土砂資源が不足したため、海砂利の採掘量が増加した。そのため、大阪近くの徳島では、鬼ヶ州は良好な砂が堆積していたため掘削の対処となった。

徳島の地域住民や漁業者のヒアリングでも、この時期に砂利採取船が河口域に多くおり、採掘が行われていたとの証言が多い。その結果として、1972年以降の空中写真には、鬼ヶ州は明確に判読できなくなる。

河口のバリアとなっていた砂州の消失により、砂州の陸側の静穏域も消失した。また、河道内に波浪が侵入するようになった。沖州地区の潟湖のイナ池が埋立てられ、汽水域の喪失が進んだ。

(c) 1990年

河口右岸側に、人工島形式の沖州マリンピアが埋立造成された。前浜干潟の埋立による消失が生じた。その結果、左右岸の対象性が崩れることとなった。

沖州海岸の前面は水路となった。

(d) 1996年

1990年以降、同様の状態が続いている。河道内の住吉干潟が河道内に侵入し、大きく発達した。

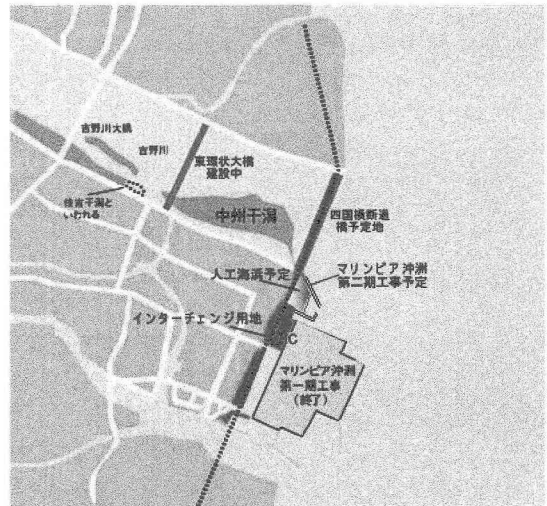
一方、住吉地区前の“砂州島の干潟”は、小規模ではあるが沿岸砂州と干潟がセットになっているバリアーアイランドの地形を有している。

開発が続くなかで、河道内は本来的に開発ができない

ため、干潟環境が残ったといえる。

5. 吉野川河口の今後の開発

飯原氏の画文集に表現されているように、吉野川河口域では、特に1970年代以降に開発が続いてきた。大河の河口特有の砂州と湿地の原地形とそれに応じた景観は失われた。徳島市の中心的市街地がある吉野川河口右岸側の海岸はほとんど埋立地となって工場が立ち並び、市民が気軽にアクセスできる雰囲気ではない。



図一11 吉野川河口域の開発状況

さらに、図一11に示すように、今後も開発計画が続々とある。現在、東環状大橋が河道内に建設されており、干潟や河道の空を含めた空間への環境影響が懸念されている。また、さらに、高速道路が河口を通過するルートが想定されており、河道内にさらに大型の橋が架けられ、水域に構造物が建ち、空間が遮蔽される計画となっている。

道路と港湾の計画が一体化しているため、港湾事業のマリンピア第二期工事予定では、インターチェンジ用地として、沖州海岸をさらに埋立する予定である。人工海浜造成のミティゲーション措置はとられるものの、もとの沖州海岸の白砂青松を知る徳島市民にとっては、はるかに空間の広がりや景観という環境の質としては劣化した状況になってしまう。

これらの開発計画は、道路と港湾の複合形であるため総合的な検討が行われることはなかった。計画の将来性も十分議論されたとはいえない状況である。

6. 考察

飯原氏の画文集は、感性豊かな画家による画と文章の表現であるが、地域住民に共感され愛されてきた作品群

である。地元企業が、徳島の経済発展を喜びつつも、失った何ものかを懐古する資料としても、変遷史として出版していることも、多くの人の心を捉えている証であろう。

現在の徳島は、都市の中に吉野川の大河の流れや新町川の水辺が身近にあり、ほかの都市と比較すれば環境が良好なほうである。しかし、景観の変貌は明らかであるが、景観のどの要素がどのように失われ、それらの要素に住民たちが何を投影し、何を感じ考えてきたのかは、記録に残りにくいと考えられる。

本研究で対象とした画文集には、芸術的価値のみならず、これらの環境要素と対応した住民の思いが描かれている資料価値がある。

徳島の都市自体が河口砂州の地形を活用して形成されてきたが、現在は改変が進んでおり、大規模なレベルでは原地形の観察は不可能である。

沖州海岸にいたっては、白砂青松の砂浜が埋立られ、海水浴場が消滅し、今後は、高速道路が通過していくエリアとなっていく。海岸の埋立で、河口砂州から発展した湊町は、事実上の地域アイデンティティを失うと考えられる。

わずかに残った原形的な自然として、吉野川の広い河道内に形成された砂州島がある。ここは結果的には、「人間が定住する前の徳島の環境の箱庭」となっている。砂州や塩湿地の生態系は、この砂州島と干潟で観察できるものも残っている。

現在の徳島の地域環境を定位し、将来を考えるためにも、画文集を再読し、失われたものが何か、それによって住民の意識や心理の何が傷つき変わったのかを、詳しく洗い出していく作業が必要と考えられる。

この作業は決して懐古趣味ではなく、今後なお継続して起きようとしている環境の改変に対して、個人の視点から何が変わるかを予測できる資料でもある。

画文集に表現された世界は、住民の等身大の感覚であるが、地形改変は一般の人の日常的なスケール感を超えた現象である。目前の景観の変化を、地形レベルのマクロな変化と併せて考えるための手法が必要である。そのひとつとして、経年的な空中写真資料をもとに、郷土史、古老のヒアリング、現地踏査を行い、立体的に環境変遷を理解していく手法がある¹⁰⁾¹¹⁾。

本稿で論じた画文集の判読は、マクロな地形改変や景観の喪失が、地域住民のアイデンティティの何に障り、住民の心にどのような作用をもたらすのかを熟考するための基礎資料となると考えられる。

今後、まだ開発が行われる予定の吉野川河口では、一般市民から、景観や身近な生物の喪失への危惧が訴えられている。それに対し、一般的な環境影響評価では、人々の心理への影響は評価項目に入っていない。しかし、各地で、自然海岸の喪失後に多くの地域社会が変容し、時に崩壊していく事例を考えると、景観と生物の存続が

地域のアイデンティティを形成している以上、不要不急の改変は避けるべきであろう。

7. 謝辞

画文集の画家・作家の飯原一夫氏には、作品の転載と論考を御許し頂いた。氏の表現の世界の意を汲んでいるか心配だが、河口や海岸の環境を愛好する者として強く心を動かされた作品について論考をまとめる機会に、多大なるご協力を頂き、心より感謝申し上げます。

本研究は、とくしま自然観察の会が、徳島市内で市民の公開勉強会として開催した「干潟塾」にむけて収集した資料の解析によるものである。本稿で示した手法は、家庭内にある郷土資料から、環境変遷を研究できる特徴をもつ。今後、地域住民が自らの地域を自分たちで調査研究するためには、価値ある資料が足元にあることへの気づきが重要と考えられる。干潟塾の準備に関わられた多くの方々、議論の参加者のみなさまにお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 井口利枝子、田島正子、和田恵次：吉野川河口域におけるシオマンキとハクセンシオマネキの分布。徳島県立博物館研究報告, 7. pp. 69-79. 徳島県. 1997.
- 2) 清野聡子：四国三郎吉野川の河口干潟に何が起きたのか、徳島の自然, No.66, pp. 1-4, 2004.
- 3) 中野晋、北野利一、藤川美和：吉野川下流部の地形変動と洪水による河口砂州変形計算, 海岸工学論文集, 第46巻, pp. 641-645, 1999.
- 4) 上月康則、倉田健悟、村上仁士、鎌田磨人、上田薫利、福崎亮：スナガニ類の生息場からみた吉野川汽水域干潟・ワンドの環境評価, 海岸工学論文集, 第47巻, pp. 1116-1120, 2000.
- 5) 清野聡子：映像資料にみる砂浜の観念史、消えた砂浜, pp. 52-57. 日経BP社, 2005
- 6) 飯原一夫：阿波銀行, 画文集 徳島一あの日 あの時-100選 阿波銀行創業100周年記念.
- 7) 飯原一夫：画文集 なつかしき徳島, 四国放送株式会社, 1989.
- 8) 飯原一夫：徳島中央公民館, 徳島市民双書, 画文集 徳島慕情, 1980.
- 9) 徳島市市史編纂室, 徳島市史別巻 地図絵図集, 徳島市, 1978.
- 10) 清野聡子・足利由紀子・安部元子・宇多高明：大分県中津干潟における海岸の変遷-写真資料に基づく解析-, 海洋開発論文集, 第19巻, pp. 261-266, 2003.
- 11) 角本孝夫・太田慶生・清野聡子・宇多高明・澤藤一雄・藤田則康・駒井秀雄：江戸期以降における青森県大畑川の氾濫原と河口の変遷, 河川技術に関する論文集, 第6巻, pp. 387-392, 2000.

**FEATURES OF THE ORIGINAL LAND MORPHOLOGY AND
ECOLOGY OF THE YOSHINO ESTUARY
AS SEEN THROUGH LOCAL ART AND POETRY**

**Satoquo SEINO, Rieko IGUCHI, Kensuke CHIKAMORI
and Tamako IWAMI**

As a former castle town located on the estuary of the Yoshino River, Tokushima City has been shaped by the estuary's natural land morphology, including barrier islands and a network of waterways. Locally published illustrated poetry booklets have recorded images and text with the power to evoke nostalgia among local residents. Environmental features are discernable in the landscapes of the past seen through the eyes of these artists, and their viewpoints identified. The alterations in natural land morphology since these images were created have been deciphered with the use of aerial photographs, inducing regret for lost environmental features in local residents. The loss of the original estuary landscape through development is considered in view of the topographical and ecological features deciphered through these illustrations.